皆さま

ご無沙汰しております。はっと気づけばもう秋で、じきに学校も始まります。なのに１０月の学会発表の準備が手につかず、焦燥の日々を送っております。

７月の白金の研究会当日、炎天下に駅から明学まで歩いて汗が止まらなくなり、どうやらそれが熱中症の引き金を引いたらしく、体調を崩し、夏風邪を引いてしまいました。

自分は九州男児だ、夏男だ、夏に風邪を引くようなやつは軟弱者だと信じてきたのですが、その自信は木っ端微塵に打ち砕かれ、高熱で臥せる羽目に。

夏の風邪は冬の風邪以上に辛く、なかなか熱が下がらない。そもそも３７℃の熱があるのは自分の体なのか、外の空気なのか。いや内も外も３７℃を超えていたように思います。結局、体調が戻るまで２週間ほど要し、そんなことが２度もあり、茫漠とした日々を送って、ふと気づけば９月です。

朦朧とした頭で、だらだらミシェル・セールを読んでいたのです。

『パラジット――寄食者の論理』（法政大学出版局、及川馥／米山親能訳、1987年）

Michel Serres, Le Parasite, Pluriel, 2014(1980).

セールの書きぶり自体がもや～っとしているので、もやついた夏の頭にはちょうど良いように思ったのですが、ますます意識が遠のいただけだったように思えます。話がやたら飛ぶし、私ごとき浅学の徒には付いて行くのがなかなか難しい。５百ページにも満たない本なのに、やけに時間がかかり、もやもやっと読み終えました。

以下、このところずっと研究会等で問われてきた主体性の問題を、この著作を繙きながら取り上げ直してみたいと思います。添付するファイルは３つに分かれます。

（１）ミッシェル・セールにおける第３項排除の問題

（２）協働体としての主体

（３）寄生から共生へ

（１）はいわば総論で、思いがけず長くなりました。授業でも使おうかと思います。（２）は村田先生へのご質問を発展させたもの、（３）は三井先生からのご質問に私なりに応えたもので、比較的短い。後期の開講を控え、皆さまお忙しいでしょうから、余裕のあるときに目を通して頂ければ幸いです。

ミッシェル・セールにおける第三項排除の問題

ミシェル・セールはラブレーやユゴー、バルザックなどを思わせる途方もない書き手です。専門の科学史＆科学哲学を超え出、ヨーロッパの思想史＆文化史の総体を睥睨せんとする。

博学多識で、むやみに語彙が多く、呆れるばかりのレトリックを自在に駆使する。専門家でもないと、とうてい原文では読みこなせません。文字通り数え切れぬほどの著作があり、代表的なものは殆ど翻訳されていますが、にもかかわらず、フランス現代思想の旗手たちの中では最も読まれていない思想家ではないか。

かれが依拠する科学思想の広範さに文系は付いて行けず、かれが披瀝する文学的レトリックに理系は眉をしかめる、という案配で、正当な後継者を得られず、９０歳を超えた今も孤絶しながら奔放な思索を繰り広げている。その思想の全貌について語るべき言葉を私は持ちません。

とはいえ、以前読んだ時と比べ、セールの言わんとするところとか、論法とかロジックがよく解るようになりました。唸らされる解釈や分析も多かった。自分と似た関心の持ち方だよなーと気づきましたが、それはセールが暗黙の内にベルクソンを下敷きにしているせいでしょう。科学的素養を基礎にすると自ずとそうなるのだと思います。専門のライプニッツにはむしろ批判的です。

実際、セールの生涯のライバルと言うべきはベルクソンかもしれません。その名が何度となく批判的に言及されますが、納得の行く議論にはなっていない。むしろ敢えてベルクソンと対決させてやるべきではないか。前からそう考えているのですが、なんせセールはむやみに書く。いまだに書き続けている。インタビューのたぐいも膨大で、なかなか全部は読めない。翻訳は出そろってきたので、機は熟しつつあると言えるのですが……

翻訳こそ多いが、その思想を自らのものと引き受けるような研究者が日本にいるかどうか、定かでない。……などと、ついうっかりツイッターに書いたら、専門家の清水高志先生に見つかり、「オレの本を読め！」と叱られました。すべて解決済みだ、と。

本書が執筆されたのは７０年代中葉で、公刊は１９８０年です。思えば４０年近く閲します。フラクタル理論の話など些か時代を感じさせますが、私の見るところ、かれが指弾する近代のアポリアは何ら乗り越えられていない。幾何学の起源について、社会契約について、固有なものの糞便的起源について、経済と貨幣の原罪性について、およそ人間の文明にまつわる、ありと凡ゆる問題について論究されます。

その洞察の深さ、分析の鋭さ、筆致の鮮烈さは一向に古びていない。哲学書というより文学書と言うべき。無味乾燥な記述など１個所もなく、文体の生彩に魅せられる。まさに知の万華鏡。魅了されますが、そこから首尾一貫したロジックを取り出すのは極めて難しい。

紛れもなく巨匠であるセールには後継者がいない。研究も（清水先生を除けば）ほとんど進んでいない印象で、それは彼の書き方が人を選ぶからでしょう。暇にあかせて読む分には目覚ましく啓発されますが、そこから何か実のある論理を取り出そうとすると困惑させられる。セールが投げ出したままの問題に自分自身が直面させられることになるからです。

＊

『パラジット』は森羅万象に説き及ぶ大部の書で、要約などできません。むしろ要約されるのを拒むような形でセールは書く。１つに要約され得ない世界の有り様を自らのエクリチュールという形で再現しようとするかのようです。

半ば辟易とさせられながらも、一方ではこうも思います。厳密な学としての哲学を標榜するような哲学プロパーの集団は、７０年代にセールらフランスの思想家が到達していた認識の水準から後退してしまっているのではないか。

そこでは今なおカントが聖典扱いされています。もともと物理学者だったカントはプロシアの大学の中でしか生きて行く方法がなかった。臆面もなく自由を説いたら、たちまち社会的に抹殺される。老年に至るまで長い準備をし、堅固で巨大な体系構築を行ない、解る人だけ解るよう本音の部分を埋め込んだ。

哲学はつねに体制との闘いでした。ここでいう体制とは王権や貴族階級ばかりではありません。頑迷な僧侶階級とも闘い、同じ学者どうし争い、愚昧な大衆をも相手にする。とりわけプロシアのような後進国では、もの言えばくちびる寒く、身の危険に晒されかねず、大学人という仮面に自らを隠す必要があった。そんな慎重なカントの処世術を後世多くの人がまねた。

いわばカニの甲羅のようなものです。目につきやすい、その難解な上っ面が哲学だと世人は思い込んでいる。が、本義は中にある。通常は目に見えない体系の内部にある。体系性は哲学の襤褸の衣にすぎぬ。ドイツより更に後進国の日本では、その上辺だけを真似ることに終始した。

とはいえ、近代の日本の学者たちは自分自身が国家の圧力に晒されたため、近代哲学の持つ二重構造に鋭敏だったように思います。実際にテキストで言われていることと、哲学者が本当に言わんとしたことには乖離がある。それを読み取る力があった。だから自分自身の思索をも構築できた。

戦後、自分自身の哲学を構築し得た者はほとんど皆無です。哲学は欧米の知識を身につける習いごと、たんなる基礎教養の１つに成り果てた。そんな傾向が最初からあったのは事実ですが、戦後とりわけ現代における凋落ぶりは目も当てられない。哲学を論理と語彙の紙上の操作としてしか見ていない。

先行するテキストを金科玉条とし、その訓詁注釈に身を捧げるのが哲学者であるようなイメージを近代の欧米のアカデミズムは作り上げた。江戸以来の訓詁学の伝統がある日本は、まんまとそれに乗っかってしまった。真理は１つであり、様々なテキストを照らし合わせてそれに迫るオレって学者っぽい！と思う。まわりも納得してくれる。

カントのテキストは一見すると、とても扱いやすい。終始一貫した論文にしやすい。それはカントの甲殻論理しか見ようとしないからです。実際には、いかなるテキストにも破断があり、断裂がある。もし本当に終始一貫した哲学があるとすれば、それは何の創意も創見もない、死んだ哲学でしょう。

哲学に亀裂が生じるのは、真理そのものが１つではないからです。これを《１》に還元しようとする試みは必ず崩壊する。むしろその崩壊を積極的に示そう、いや生きようとしたのが例えばデリダの脱構築だったと言えるでしょう。それが文体としても表現される。

１なるものから多なるもの、他なるものへの出奔。それがフランス現代思想の冒険だったと言ってもいい。そんな試みは大きくルネッサンス以来の近代思想の轍をなぞっている。そもそも、この試みを始めたのはモンテーニュだったと言っても過言ではありません。

彼らキリスト教国の思想家は癒しがたく《１》に取り憑かれている。世界の多様性を前にして、多に魅了されながら否応なく《１》に引き戻されてしまう。たとえば、際限なく１者を斬首し続けるバタイユの構想は無限の暴力を解放するだけで、救いがたい混迷に終わる。

多を統合する１の秩序ではなく、１なき多の混沌でもない。多としての多の肯定。１を媒介とすることなく多を多として直接的に繋ぐ、ヘルメスのシステムをミッシェル・セールは夢想する。そこには幾つもの中心があり、幾つもの近傍と杣道がある。

北西の進路の上に、見上げれば北斗七星が掛かっている。《１なるもの》の圧制の下、多を多として保持し続けるシステムを、フランスの優れた思想家は求め続けた。その試行錯誤の軌跡は、今後の世界の導きの糸ともなり、いよいよ輝き増すことでしょう。

とはいえ、彼らのテキストをまたしても金科玉条とし、またしても訓詁注釈の対象とし、相も変わらず《１》の幻想を支え続けるのであれば、ヨーロッパ中心主義の枠内に留まるばかりで、多としての多を創成する運動に参入することは永遠にできず、古き欧米のお先棒を担ぐに終わるでしょう。事実、フランス思想は何やら好事家の手慰みになろうとしている。

＊＊

セール哲学の基本となる論理は一見すると単純で、「第３項の排除と包摂」だと言えます。排除され、抑圧されたものが回帰し包摂されるダイナミズムに注目し、それを本書はパラジット、すなわち「寄食者」ないし「寄生体」というイメージで捉える。

その同じ論理をあらゆる領域に広げる。博学多識のセールならでは。この「寄生」という概念はベルクソンにもあって、とても刺激的です。なのに、セールのスノッブな書き方ではその妙味が世人に伝わりにくい。

なぜ彼がこうも「第３項排除」にこだわるのか。今回その必然性がストンと腑に落ちました。これは「排中律」のことで、フランス語では Principe du tiers exclu、英語では Law of excluded middle となります。

ライプニッツにおいても主要テーマだった「排中律」の不可能性を、セールはたんに論理学の問題としてではなく、論理と人間、自然科学と人間科学に通底する本質的な問題として捉える。人類学や社会科学のみならず、文学テキストが重要な資料として参照される。

なぜそんな展開が可能になるかと言えば、そもそもセールの「排中律」の捉え方が極めて独特だからです。通常、排中律はＡ（第１項）と非Ａ（第２項）が論理的に両立し得ず、両者の間に中間項（第３項）があり得ないことを証明するものです。Ａであって、同時に非Ａでもあるような項を認めれば、そもそもＡという単位を立てること自体が無意味になります。第３項は排除されねばならない。

たとえば、ここに赤いリンゴと青いリンゴがあったとして、赤いリンゴは青いリンゴではあり得ない。半分、青い。そんな赤いリンゴは存在してはならないのです。

とはいえ、現実のリンゴは決して真っ赤でも真っ青でもない。まったく同じ色、同じ形のリンゴを見つけることは絶対に不可能でしょう。論理は現実に突き当たって砕ける。排中律は論理の世界においてしか可能ではない。脳の中にしかない。にもかかわらず、それが論理を超えて現実に浸潤する。そこに西欧近代の病いが生じる。

たとえばフランス人との「ハーフ」のアナウンサーが話題になる。このとき「ハーフ」とは何でしょう？ 半分フランス人ということでしょうか。そんな奇怪な人間が地球上に存在しうるでしょうか。

私たち日本人のうち５１パーセントの人がネアンデルタール人由来の遺伝子を持っているそうです。とすれば日本人の半分はネアンデルタールとのハーフなのでしょうか。

「ニューハーフ」と呼ばれる人たちが新宿歌舞伎町にいます。かれらは半分女性なのでしょうか？

そもそも生物界に男／女の区別など存在するのでしょうか。動物に雌雄の別はあっても、それは人間における男女の別とは全く違います。原理的に考えれば、男女の間には無数のスペクトルがあって、その中間に様々な性の有り様が見られるというにすぎない。そこにあるのはグラデーションであって、決して単純な対立項ではない。

にもかかわらず怪しげな生物学の知識を基に男性／女性という相反する２項が立てられ、その属性が定義され、イデオロギー化される。男は外で働き、女は内を守れ。外でも内でも「生産」に励め、というわけです。

男女の別とはイデオロギーにすぎません。しかしそれが法に書き込まれるかぎりは、現実的な力を持つ。

最初は論理的な要請にすぎなかったものが存在論的な要請に拡張される。これは「排中律の病い」とも言うべきものです。そんな病いが世に蔓延するのに手を貸してきたのが近代哲学だったのではないか。「我思う、ゆえに我あり」の近代的な世界観においては、これ以上疑うことのできぬ基体としての《我》を前提せざるを得ない。そんな主体が見出されるや否や、主体ならざるものとしての客体＝対象が発見される。

かくして主体という第１項と、客体としての第２項が相対し、それが世界の原型と見なされるに至る。主体であって同時に客体でもあるもの、我であって同時に汝でもあるようなものは、至高にして至純の論理からすれば不純で汚らわしい存在であり、いわばキメラ的な怪物と見なされてしまう。第３項は徹底的に排除される。排除の論理が哲学的に正当化されてしまう。

清水先生から「第３項排除」は中村雄二郎がでっち上げた訳語で、「排中律」と訳すべきだと叱られましたが、そうではない。少なくとも『パラジット』は自然科学と人間科学のフラクタルな同型性を示そうとするので「排中律」と訳してしまうと訳が解らなくなります。とりわけ「排除」exclu の含みが決定的に重要です。

ただし「フラクタル」と言い換えるだけでは何を説明したことにもならない。明敏なセールは、各々に別の起源があることを認めていて、そこにギリシャ人のいう「シンボル」の問題が伏在すると言う。それは幾何学の起源であると同時に、社会の起源でもあります。

ひとたび第３項を排除した後は、いかに第１項が生起し、第２項と関係を持ち、両者が弁証法的な展開を遂げるか、終始一貫して体系的に論証するのが可能になります。むしろ、それこそ近代哲学の責務と見なされてきた。第３項が顧みられるとしても、いわば添え物として、理性の自動運動の背景として、あるいは潜在的なものとして脇役扱いされる。こうしたロジックの総体にセールは異議を唱える。

第２項を媒介として生成発展する第１項の英雄譚は、主人と奴隷の弁証法としてモデル化されます。第３項は永遠に排除されたまま、遠回りの観客の地位にとどまる。それは本当だろうか。私たちの生きる世界は、そして社会は本当にそのように動いているのだろうか。

セールはこのように言います。主人と奴隷の関係を１者と１者の関係と見なし、闘技場のなかで何かを賭けて２人のヒーローが一騎打ちをしているように思い描くのは、あまりに粗雑な誤りだ、と。「この２世紀というもの哲学は、中世の騎馬試合のような、あるいはオリンピック競技のような見世物を、ようはアヘンを提供してきたのだ」（110/92）〔原書／翻訳頁〕

存在論的な要請が、生存の要請に転化されるのをセールは問題視します。主体は混ざりもののない清潔で純粋なものであってほしい。そう私たちは願うようになる。その倒錯を非難するのです。

清潔なものへの希求。これは文明の要請ではありますが、行き過ぎれば、私たちの生物としての生存の基本的条件を損なうようになる。私たちは汚穢のはざまから生まれてくる。そして、そこに還るのです。セールの言葉を借りれば、「私たちは便と尿の間で生まれる。のみならず、そこで愛し合う。（……）同じ器官が関係に関わり、かつ排除に関わる」（259/234）。

私たちは糞便を愛することはできない。にもかかわらず、糞便のなかで愛し合う。これが文明の基本的条件というものです。「私たちは何か獣じみたものの中にいる。上品な言い方をすれば、それが社会構成員の有機体モデルというものである」（28/16）。

主人と奴隷の弁証法が始まるずっと以前から、縹渺としたノイズが世を満たしているとセールは考える。雑音や騒音ばかりではない。匂いや腐臭が辺りに立ち込めているはずだ。言い換えれば、感覚的なものが存在に先立つ。本質的なものは感覚的なものである。

世の始まりから響いていたもの、匂い立っていたもの、形なく蠢いていたもの――音や響きや匂いを捨象することで清浄なる存在の世界が立ち上がってくる。ベンヤミンなら「創始的暴力」と呼んだであろうような法の力がそこに介入する。世界を所有する存在にとっては正義、排除される者にとっては悪と見なされる力により世界は分断される。この始まりの悪、いわば「原罪」をセールは究明せんとする。

この第３項の問題は古く、セールが示唆するように恐らくプラトンやアリストテレスの第３の人間論はこれに関わる。またヘーゲルほど、それを強く意識し、弁証法の運動にこの第３項を合理的に包摂せんと企てた者は他にいないと言ってもいいかも知れません。理性とは単なる推論の能力などではなく、合理的な包摂能力に他ならない。

にもかかわらず、理知主義を護持するかぎりで、第３項排除の誘惑から逃れることはできない。私たちは清潔で小ざっぱりした論理の枠内につい自足してしまう。安楽の共同体を自明とし、それが排除に排除を重ねて出来上がった人工空間であることを忘れてしまう。自らが悪の軍団の一員であり、アダムの末裔であることを忘れる。

しかるに第３項は決して消え去ることはない。闇にまぎれて回帰し、私たちの傍で待ち受け、いつでも文明という城塞に押し入ろうと狙っている。「排除する力が裏返しにされ、第３者を忽ち引き戻す。追い出したはずなのに、いつもそこにいる」（143/124）。

私たちがモノを食べ、排泄し、性器を擦り合わせて交合するたびに、あの原初の呻きが、ざわめきが還ってくる。音や匂いが自らを取り巻いていること、自分自身がそれであり、自分はそこから生まれてきた、そこで生き、そこに帰って行くだろうことに気づくのです。

第３項を排除しない文明はない。同時に、それを包摂しない社会もあり得ない。文明はつねに自らの零落と病いと死に向き合っている。にもかかわらず私たちはその肝心な点を忘れる。文明社会が永久機関のように予定調和的に動いていると信じたがる。社会から得た自己イメージを自分自身だと信じ、自分と他人ひいては社会との関係を固定的に考える。

そうなってしまうのは、第３項こそ第一義的だということに私たちが気づかないからだ。ノイズと匂いこそが全ての始まりだ。そこから「準客体」とも呼ぶべき第２項が、最後に第１項の我が降り立つ。すべてが終わった後で、主体は覚醒する。動き始める。

第２の者以前に、第３の者が存在する。別の者に先立って第３項が存在する。老ゼノンが言うように、1端に行き着く前に私は中間を通らねばならぬ。つねに媒介項が、中間点が、仲介者が存在する。そして、この３者のゲームでは、その時々で３者のうち誰か１人に中間項が割り振られる。（116-7/99）

セールによれば、第３の者こそが関係の本質です。関係の実在を担保するのは、この第３者という存在です。「かれは関係から生じ、関係もまた彼から生じる」（同上）。第３者なくして関係はなく、関係なくして第３者もない。両者は分かちがたく依存し合っている。そうした相互依存の関係をセールは「寄生」と呼ぶのです。端的に言えば、こうなります。「関係は関係に寄生する。関係そのものが寄生体である」と（239/215）

セールは寄生という概念を用いることで、第３項排除とその包摂というロジックを、人間社会のみならず自然界にまで広げようとする。生命世界全体が相互依存の関係にあることを示そうとするのです。

ちなみに老子に次のような言葉があります。

道は一を生じ、一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ず。万物は陰を負ひて陽を抱き、沖気を以て和を為す。（老子道徳経下篇第４２章）

自然への考察を深めれば深めるほど、西洋は東洋に近づいて行く、ということかもしれません。私たちはあらためて《道》を見出さねばならない。とはいえ、東洋もまた私たちには縁遠い楽天地へと成り果てている。

デカルトのように主体から始めてはならない。かと言って、素朴な自然科学のように客体から始めることもできない。排除と包摂が際限なく繰り返される、耳鳴りのようなノイズと騒めきから、沸き立つカオスのエッジから始めねばならない。そこにミッシェル・セールにおける文体の要請が立ち現われます。文体は沸き立つ海、寄せては返す波のようでなければならぬ。

第３項排除とその包摂が同時に起こる瞬間、ないし「場所」をセールは常に問題にします。排除は避けられないが、排除され抑圧されたものは必ずや回帰する。それらは騒めきとして、雑音や騒音として、腐臭や悪臭としてシステムを取り巻き、間断なく侵入をくり返す。そんな場所をギリシャ人は「コーラ」と呼んだのだとセールは考える（388/358頁）。

排除された第３項の回帰により、システムは常に揺らいでいる。第１項（主体）＞第２項（客体）のプライオリティは忽ち突き崩される。生きたシステムとは常に危殆に晒されたシステム、頓死を避けられないシステムなのです。「生存は安定したものではない。生存すること、それはすでにして１つの過剰、１つの椿事である」（265/241）。

私たちは騒めきに包まれている。そして、この騒めきは鎮まることがない。それは外部にあっては世界そのものであり、内部にあっては私たちの生きた体から生まれてくる。私たちは世界の騒めきのなかにあり、このどよめきを受け入れる扉を閉ざすのは不可能だ。無数の波に取り巻かれながら動き回る、私たちは命で焼けるように熱い。このひと時の恍惚の火炉は、その無数の働きで絶えず擾乱を引き起こす。その源が口をつぐむとき、そこには死がある、平らな波の形をした死が。（……）はじめに騒めきがあった。騒めきは止むことがない。（228/204-5）

はじめにノイズがあった。雑音と騒音があった。それらは腐臭や悪臭と共にあった。そこから命が生まれてきた。やがて、ここはオレの場所だと唾を吐きかけ、大音声で野に呼ばわる者が出る。かれは忽ち暗殺され、その最初の人身御供から暴力としての国家の起源が、その暗い相貌が立ち現われる。

この本の主題は悪だった、と最後にセールは打ち明けます。文明の起源には光と同じぐらいの闇が、悪がある。悪こそが文明の起源にある。セールの思索とは、いかに文明の原罪から逃れ、新しいものを地上に呼びまねくか、という思考の賭けだと言えるでしょう。

＊＊＊

旧態依然とした主体主義でもなく、科学の万能を謳う客体主義でもない。主体と客体が最初から混交し、そのプロセスから世界が立ち上がってくるのは自明なことです。そこに活きて動く活動の核のようなもの、自己と社会の中間にあって、その両方に働きかけるもの、同じものの「共同体」ではなく、そこから新しいものを生み出す「協働体」の基体となるようなものを私は哲学の言葉で語ろうとしています。

おそらくそれをベルクソンは「持続」と呼んだ。ホワイトヘッドなら「アクチュアル・エンティティー」と呼ぶだろう。この、プロセス哲学の鍵概念を私は「活動体」と訳したい。持続にしても活動体にしても、哲学者自身が認めるように本来的に曖昧で、至るところに見出される。むしろそこに妙味がある。そうした「基体」を設定しなければ、理論展開が難しいからです。

ところが、この「主体の代役」を立てるや否や、たちまちその対立物が生じ、第３項排除が生じる。理論家はこの「原罪」を引き受けざるを得ない。むしろ言説の原罪性に徹底的に自覚的であることが哲学者の責務なのだとも言えます。抑圧され、排除される第３項をいかに自らに包摂するか。それは際限のない営為となります。弁証法のような大団円に至ることは決してない。

セールが特異なのはこの意味での基体、ないし準主体のごときものを敢えて立てないことです。むしろ彼の文体そのものが、その身代わりになっているかのようだ。さまざまな新しい概念が提起されますが、それが１つに収斂されることはない。セールの著作は流動するものに開かれていて、そこには始まりも終わりもない。死ぬまで彼は書きつづけ、語りつづけることでしょう。

ただそんな芸当が許されるのも、かれがフランス人で、フランス語で書くからです。セールの思考はフランス語、もっと言えばフランスという国家とその文化に守られている。いわば特権的な思想家です。

私たちに、そのような当てはない。おそらく世界中のどこにも（フランスを除いては）そんな恵まれた文化は存在しない。実際のところ、本書で彼が展開しているような貨幣論は、専門家には歯牙にもかけられないでしょう。晩年のデリダはこのことを鋭く意識していた。そして、そんな古式ゆかしい特権が失われつつあることも。もはや文芸共和国など、どこにも存在しないのです。

ミシェル・セールの思索に敬意を払いつつも、私たちとしては別の道、別の可能性を探るほかはないでしょう。それこそが私たちが引き受けざるを得ない「原罪」なのだと思われます。